

新劇社における伊庭孝の活動— 『チョコレート兵隊』上演を中心に

● 伊 藤 直 子

はじめに

伊庭孝（1887—1937）は大正から昭和初期にかけて西洋のオペラの導入・普及に大きな貢献を果たした人物として知られる。彼の活動の場は年代順に見て、①新劇、②浅草オペラ、③ラジオ放送および舞台におけるオペラ上演、④音楽評論に大きく分けられ、それらの場での伊庭は俳優、演出家、台本作家、訳詞家、評論家などいくつもの顔をもつ。若い頃から西洋音楽に造詣が深く、複数の外国語に長けていたこともあり、戯曲やオペラ台本、クラシック・ポピュラー全般にわたる歌曲、音楽評論に関しては翻訳の仕事も数多くある。

本稿では伊庭が興した新劇社の活動に注目し、なかでも台本の翻訳、主演、舞台監督すべてを初めて手掛けた作品となったバーナード・ショーの『チョコレート兵隊』（原題『武器と人』）を主に取り上げながら、伊庭の新劇時代を概観・考察する。

1. 新劇社の成立⁽¹⁾

伊庭孝は剣術家・伊庭想太郎の養子として育ったが、養父が1901（明治34）年、東京市会議長の星亨を刺殺するに及び、事件直後13歳で兄のいる関西に移り、その後同志社神学校に進んだ。しかし在籍数年にして同校を中退し、再び東京に戻り、キリスト教系の出版社・警醒社に洋書係として勤務した。時代は新劇の勃興期に当たり、新劇運動に関心を寄せていく。やがて同業の教文館に勤務する柴田勝衛と組んで1912（明治45）年4月『演劇評論』を発行し、二人はさらに俳優の上村草人・山川浦路夫妻、および柴田の友人の杉村敏夫とともに近代劇協会を立ち上げる。

近代劇協会は旗揚げ公演として1912（大正元）年10月に有楽座でイプセンの『ヘッダ・ガブラー』⁽²⁾を演じ、続いてゲーテの『ファウスト』（1913年3月・帝劇、5月・大阪帝国座）⁽³⁾を上演、世間の注目を浴びた。戯曲の翻訳はそれぞれ千葉掬香、森鷗外によるものだった。この『ファウスト』上演が大入りとなったため近代劇協会には多額の収入が舞い込み、これが劇団員たちの慢心を招いた。また上村草人と新人女優・衣川孔雀との恋愛問題、伊庭と草人との意見の相違などもあり、鷗外が仲立ちとなったものの修復が図られず、1913（大正2）年7月10日に伊庭が近代劇協会を脱会、13日二人の仲は決裂に至った⁽⁴⁾。

近代劇協会脱会後の伊庭は1913（大正2）年9月、合資組合として「新劇社」を設立、近代劇協会の理事だった杉村敏夫、会計係だった安岡克實とともに社員となり、新劇社が「伊庭孝一座」を雇用する形態とした。一座は近代劇協会所属の奥村博や玉村歌路、文芸協会出身の武田正憲、土曜劇場所属の酒井米子、新派の横山運平、そのほか新人数名らによって構成された、いわば混成メンバーであった。

2. 新劇社第1回公演⁽⁵⁾

新劇社の旗揚げ公演は有楽座で1913（大正2）年10月16日から7日間の日程で行われた。開演は午後6時、途中休憩20分をはさみ、前半がフランク・ヴェーデキントの『出発前半時間』、後

半がバーナード・ショーの『チョコレート兵隊』の2演目によるプログラムである。入場料は特等（ボックス席）が1円50銭、1等（椅子席）が1円、2等（3階席）が50銭であった。新聞の公演案内は演目と劇場と開演日時を示しただけの3行広告が『読売新聞』『東京日日新聞』『萬朝報』などに載ったほか、ラベル石鹸本舗によるスポンサー公演（10月20日）の広告が2段抜きで『都新聞』『東京日日新聞』『中央新聞』『やまと新聞』に掲載された。ここには俳優の写真付きで演目の粗筋と簡単な解説が記されている。経費の関係からか、通常の劇場案内欄には公演広告が認められなかった。ただし、公演に関する短い記事は各紙に掲載されている。

新劇社誕生の1913（大正2）年は新劇の最盛期であり、雨後の筍の如く新劇団が次々と結成され、劇壇に話題を提供するとともに、出し物も「百花繚乱、正に翻訳劇の全盛時代で、……原作を読むより、見た方が早わかりと、劇団も見物も、西欧文化の吸収に、血道を上げた」⁽⁶⁾とされている。実際に新劇社の公演前後には、たとえば伊庭が在籍していた近代劇協会は『マクベス』（9月、帝劇）、島村抱月率いる芸術座はメーテルリンクの『内部』『モンナ・ヴェンナ』（9月、有楽座）、新派の女形俳優の河合武雄、劇作家・松居松葉らによる公衆劇団はホーフマンスタールの『エレクトラ』（10月、帝劇）、文芸協会解散後に加藤精一らが設立した舞台協会はショーの『悪魔の弟子』（11月、帝劇）というように、続々と海外の戯曲が上演された。

3. 『出発前半時間』

3-1. 森鷗外をめぐって

新劇社第1回公演のプログラムはどのように決定されたのだろうか。

伊庭孝は1913（大正2）年6月29日、ショーの脚本2作を借りるため森鷗外宅を訪問している。近代劇協会を退いた7月以降も、10月の新劇社公演まで鷗外宅訪問は5回を数える。「鷗外日記」には話の内容が記されていないが、おそらく新劇社の立ち上げや公演内容について伊庭から鷗外へ相談がなされたのではないかと推測される。鷗外訳の『出発前半時間』が選ばれたのも、同じく推測の域を出ないが、『ファウスト』公演から今回の決裂まで一方ならず鷗外の世話を受けたことへの恩義があったのかもしれない。そして伊庭が抜けたあとの近代劇協会でも、鷗外訳の『マクベス』を選定しており、鷗外をめぐっての伊庭と草人との複雑な関係が垣間見られるようだ。

3-2. 『出発前半時間』の概要

プログラム前半の森鷗外訳による『出発前半時間』の原作はフランク・ヴェーデキント Frank Wedekind の戯曲『宮廷歌手 Der Kammersänger』（1899年、ベルリン初演）である。1幕物であるが、原作10場のところ、鷗外訳には場が指示されていない⁽⁷⁾。戯曲は、高名なオペラ歌手ジェラルドがドイツ国内での興行を終え、次の公演先であるブリュッセルに向けて汽車を待つ45分間に起こった出来事、すなわち宿屋で《トリスタンとイゾルデ》の準備をしているジェラルドと3人の客人・知人との関わりが描かれている。本邦初演は1910（明治43）年5月に有楽座で行われた自由劇場の第2回試演会で、二世市川左團次が主役を演じた。今回の主演は伊庭である。

伊庭は当然のことながら、この自由劇場の初演を意識し、同じ鷗外訳を使用することについては、良い脚本であれば、再度用いることにも吝かでないと考えていた。自由劇場との相違点は室内装飾と衣裳、そして上演時間で、訳文は原文より長くなりがちだが、45分間の事柄なので、自由劇場が2時間かかったところを、1時間20分くらいに収めたいとの意向だった。そして左團次が落ち着いた演技をしていたことに対して、解釈を変え、出発前の切迫感を演じたいという思いが伊庭にはあった⁽⁸⁾。

4. 『チョコレート兵隊』

4-1. 『チョコレート兵隊』上演まで

プログラム後半を占める『チョコレート兵隊』の原作はジョージ・バーナード・ショー George Bernard Show の戯曲『武器と人 Arms and the Man』（3幕、1894年、ロンドン初演）で、伊庭孝自身が翻訳を手掛けた。伊庭訳に先立ち、坪内逍遙と市川又彦の共訳が1913（大正2）年5月に刊行されている。伊庭によれば、逍遙が文芸協会解散後、自身の翻訳戯曲一切の上演を拒否したために、伊庭自らが新たに訳すことになったという⁽⁹⁾。

伊庭がなぜこの作品を選んだかについては複数の理由が考えられる。まず第一に、新劇ブームという時代の趨勢の中で、西欧の戯曲が次々と翻訳・上演され、その中心にショーの作品があったことが挙げられよう⁽¹⁰⁾。

第二に、『近代思想』誌上において堺利彦が中心となりショーを大きく取り上げていたことが指摘される。1910（明治43）年の大逆事件後の閉塞状況を打ち破ろうと大杉栄と荒畑寒村が1912（大正元）年10月に発刊した同誌に、伊庭は同志社時代の学友・高島素之を通して親しみ、創刊号から戯曲や評論を寄稿していたのである。堺は伊庭の『チョコレート兵隊』以前に『武装と人』として梗概を発表したり、『人と超人 Man and Superman』の翻訳を連載したりしている。第三に、これが最大の理由かもしれないが、後述するように伊庭自身の演劇的必然性ともいべき事情が関係していたように思う。

海外に目を向ければ、『武器と人』はロンドン初演後、ベルリンとウィーンで『英雄たち Helden』のタイトルで上演され大ヒット、さらにウィーンのおペレッタ作曲家オスカー・シュトラウス Oscar Straus によって作曲され、『勇敢なる兵士 Der tapfere Soldat』として1908年ウィーンで舞台に掛けられた。このおペレッタが今度はロンドンでミュージカル・コメディ『チョコレート兵隊 The Chocolate Soldier』（1910年）となり人気を博した⁽¹¹⁾。

そしてその頃、ロンドンで組織されアジア諸国を巡業公演していたバンドマン喜歌劇団 the Bandman Opera Company が日本公演を行った際、1911、1912（明治44、45）年におペレッタ『チョコレート兵隊』を披露し、日本人の知るところとなった⁽¹²⁾。伊庭も日本の観客がすでに作品を知っていることで上演がしやすいと感じていた。しかし、伊庭がタイトルを『チョコレート兵隊』と変えた理由は、おペレッタの人気にあやかるものではなく、次項で述べるようにあくまでも作品の意図に即して命名したとのことである。

4-2. 粗筋と配役

戯曲はブルガリアの東ルーメリア合併問題をめぐり1885年に起こったセルビア・ブルガリア戦争を背景としている。出征しているブルガリア人の父ペトコフ少佐と婚約者サージャス少佐をもつ娘ライーナの寝室に、逃走中のセルビアのスイス人傭兵ブルンチュリ大尉が飛び込んできたところから話が始まる。彼はピストルの弾の代わりにチョコレートを所持していたというが、今はもうないのでと所望し、ライーナはチョコレートを渡し一晩かくまうことに。そしてブルンチュリ大尉は終戦後、借りたコートを返しにライーナ宅を訪問し、本当はスイスのホテル王の息子だと明かしてライーナとの結婚を果たす。一方婚約者のサージャスも戦争の無意味さに苛まれて、紆余曲折あり結局お手伝いのルーカと結婚することになる。最後の場面でライーナは、ブルンチュリを助けたのは、彼がスイスの皇帝だからではなく、チョコレート兵隊だったからと告白。伊庭は、このライーナの言葉のもつ一種のセンチメンタリズムの中にショーの主義（＝反ロマンチズム）と矛盾したところがあり、そこに面白さを感じてタイトルにしたと語っている⁽¹³⁾。

主な配役はブルンチュリ大尉＝伊庭孝、娘ライーナ＝酒井米子、ペトコフ少佐＝武田正憲、サージャス少佐＝住田良三、お手伝いルーカ＝玉村歌路、母親＝五十嵐芳野であった。

4-3. 伊庭の演出

伊庭は『チョコレート兵隊』を演出するに当たり、「たゞ単に面白い演劇しほいとしてのみ取扱つても喜劇として実には上乗なものである。諷刺劇として見れば、頗る皮肉の狙ひ処は多い」⁽¹⁴⁾と述べている。諷刺についてはさらに、「芸術上の作品の検察が嚴重な時代に遭遇した者は、夫相應の防禦的準備をしなくてはならない。直截(ママ)なイブセンやズウデルマンが演じ悪い国に於ては諷刺劇を演ずるより外ない。それも一寸は察しの附かぬ所が宜い。俗衆には竟に分らぬ仕舞で終る位のものが宜い」⁽¹⁵⁾と強調、『チョコレート兵隊』はそうした作品に相應しいと結論づけている。当時の時代の空気がこの一文から読み取れるように思われる。その一方「皮肉の狙ひ処」を明確に伝えているのが『近代思想』誌上の上演広告で、「伊庭孝一座の新しい芝居は非武士道・功利的恋愛・恋愛非神聖・芸術非神聖・非愛国を主張する」⁽¹⁶⁾との強烈なメッセージが目飛び込んでくる。これは同誌の読者層を予め把握できていたからこそ可能な宣伝文句だったに違いない。

喜劇的あるいは諷刺的な作品においては台詞が正劇以上に重要な役割を果たすことはいうまでもない。翻訳の難しさも一入だと感じる。伊庭が演出上、とくに台詞について考慮していたことを挙げておきたい⁽¹⁷⁾。

「自分の言葉遣ひを土台として、今迄に出来かけた新しい芝居の癖を治す事に努めた。即ち文芸協会式、自由劇場式、それから女優節などが即ち癖である。」

「俳優の地方訛は止むを得ない事であるが、台辞せりふの抑揚めりはりといふものが、近頃は形式的に傾いて、真の実生活の会話から発足したエロキウシヨンでない場合が寡くない。それでは新しい芝居も歌舞伎劇と異つた処はない。」

「時代々々によつて演出の形式は変化していく。然し自然的な表現に打勝つ演出法はない。型と云ひ工夫といふのも、皆自然的にやつてはだれる部分を、演劇の約束に随つて形式によつて糊塗するに過ぎない。」

こうした伊庭の発言は、かつて近代劇協会の公演に対する劇評でしばしば指摘された台詞回しや発声の拙さ、旧劇の型を連想させる身振りの不自然さなどを改善したいという意志の表れともとれる。伊庭は、日常性に基づいた自然な台詞回しに一番適するのがショーの作品と考えており、従つて伊庭がショーの作品を選んだ背景には、演劇人として取り組むべき実践的課題があったように思えてならない。

4-4. 伊庭の翻訳

伊庭自身は翻訳についてあまり多くを語っていないが、自ら翻訳を試みたのも、逍遙訳が使用できないこと以上に、演出の意図を叶えるために必要な作業であるとの認識があったはずである。「シヨオの劇を演ずるには、軽快な技芸を要する。軽快な訳文の台本を要する」⁽¹⁸⁾とのストレートな発言は伊庭の基本的な考え方を示していると思う。

伊庭が目指す軽快な訳文とは実際にどういうものであったのだろうか。それを知るには逍遙訳との比較が有効であろう。第1幕でブルンチュリ大尉が娘ライーナの寢室に忍び込み、欠伸をしながらそのまま眠り込んでしまう場面を取り上げてみよう。最初は逍遙訳、次に伊庭訳を挙げる。ただし身振りや口調を示すト書きは省略してある。

〔逍遙訳〕「眠り、眠り、眠り、眠り、ねむ一何所にあるんだ、一体？ それ知りたいんだ。何所にあるんだ予は？ 是非起きてゐなけりやならん。如何したつて起きてゐられやしない、危険なことでもなけりやーいゝか？ 危険、危険、危険、きけー危険は何処だ？ 探さなくちゃ不可。何を探してゐるんだつけ？ 眠りー危険ー解らん。あゝ然うだ、やつと解つた。よろしい。此寝台に上れば可いんだ。が、眠ちやいけないー危険だから。横になつても不可。一寸腰だけ掛ける。あゝ！」⁽¹⁹⁾

〔伊庭訳〕ねむ、ねむ、ねむ、ねむ。ここは一体どこだ。どこだらうな。どこにあるんだな己は。起きてゐなくちやならん。危険でもないとしても起きちやをられん。いいかな。危険、危険、危険、危。危険は何だ。何が危険かな。何を探してゐるんだ。眠る。危険。分らん。ああ、そうだ。解つた。これでいいんだ。寝台に上らう。寝ちやいかん。危険だから。横になつてもいけない。腰をかけるだけ。ああ。」⁽²⁰⁾

この台詞は筋の転換を招くような重要な箇所ではないが、伊庭のこだわった普通の会話の調子が多少感じられるのではないだろうか。半睡状態であることが断片的な言葉の繰り返しに反映され、ここにユーモラスな身振りが伴い、伊庭が演じるとかなり滑稽味が増したことが想像できる。

4-5. 劇評から⁽²¹⁾

各紙誌の劇評から、『チョコレート兵隊』の上演がおおむね成功裏に終わったことが分かる。共通するのは伊庭の演技への賛辞である。たとえば『近代思想』誌上では、ショーに一家言ある堺利彦が「訳文には稍不満があるが、演技は先ず上出来だと思ふ」、荒畑寒村はショーの作品自体については否定的ながら「伊庭が、独り大に異彩を放つて居る」とそれぞれ評している。あるいは「軽妙なる台詞と巧まざる自然の滑稽が宜く……伊庭孝の役者振を上げた」（『二六新報』）一方で、「伊庭孝氏の技巧の極、やがて邪道に走らんとしつゝあるのを恐る」（『時事新報』）と警告を鳴らす論者もいた。

伊庭の演出についても好意的で、たとえば「演出法も徹頭徹尾伊庭式を發揮してゐた、伊庭のチョコレート兵隊は伊庭其人の如く軽快で皮肉だつた…伊庭孝一座は今秋の芝居中最も面白いものゝ一つだ」（『やまと新聞』）、「喜劇と云ふものゝ真の味はこんなものかと、看客を嬉しがらせたる技倆は感服の外なし」（『萬朝報』）といった評がある。とりわけ常に伊庭に辛口批評を浴びせていた同業の楠山正雄が、伊庭の早口や軽さを批判しつつも、『チョコレート兵隊』はみんな気持ちのいいほど、日本流のセンチメンタリズムを忘れてやつてゐた。みんな伊庭君の調子でやつてゐた。これまで日本で演じたシヨオの芝居で、今度が作者がねらつてゐる舞台のカリカツウルに最も近くやつてゐた。大変面白かつた」（『生活と芸術』）と述べているのが印象的である。

5. 新劇社のその後

伊庭孝は新劇社の第1回公演直後の1913（大正2）年12月、ホーフマンスタール Hugo von Hofmannsthal の二つの韻文劇『窓に立てる女 Die Frau im Fenster』と『白い扇 Der weiße Fächer』の翻訳を現代社から刊行した。しかし、これらの作品が実際に舞台に掛けられたという形跡は見当たらない。

新劇社の第2回公演は1914（大正3）年1月2日から11日までの予定で有楽座で挙行された。演目はイプセンの原作を伊庭孝が翻案した『社会の礎』（3幕）とショー原作、森鷗外訳の『馬

盗坊 The Shewing-up of Blanco Posnet』(1幕)。しかし資金難の上、翻案の失敗や稽古不足が重なり、興行は不入りで8日間で打ち切られた。これは新劇史上初の打ち切りとして話題になる。新劇社は結局1915(大正4)年1月に京都・大阪公演を行って解散した。伊庭は再起をかけ、新劇社解散前にPM公演社を立ち上げ、1914年11月29日から5日間にわたり、『チョコレート兵隊』とヘッベル Friedrich Hebbel 作『処女 Maria Magdalene』(吹田芦風訳、3幕)を引き下げて本郷座で第1回公演を催すが立ち行かず、その後近代劇協会に復帰し、『金色夜叉』『桜の園』などの舞台に立ち、俳優稼業を続けた。

おわりに

近代劇協会から新劇社を経てPM公演社へ至る伊庭孝の新劇活動の道のりは、そのまま日本における新劇運動の盛衰の過程と重なり合う。伊庭自身も衰退の原因の一端を担ったことに自責の念を抱いていた。しかし、作品は命を長らえる。『チョコレート兵隊』はショーの戯曲ではなく、オスカー・シュトラウスのオペレッタに基づいた音楽劇として、その後伊庭の活躍する浅草オペラで上演を重ねる。浅草オペラでは、伊庭がショーの作品上演を通して得た諷刺や喜劇のセンスが大いに生かされることになる。そういう意味からも新劇社の活動は無為に終わったわけではないと感じる。

註

- ・本文中の旧漢字は氏名以外、新漢字に書き改めた。
- ・引用文中の旧仮名遣いはそのまま記したが、ルビについては適宜省いたところがある。
- ・ショーの作品について、『筋書』と出版された台本には『チョコレート兵隊』と記され、その他様々な表記が混在するため、本文中においては便宜上『チョコレート兵隊』とし、引用文中や参考文献の表記に関しては原著のタイトルに従った。

(1) 新劇社については主に以下を参照。

- ・伊庭孝「新劇社の組織」『趣味』1914年1月号、12-13頁。
- ・伊庭孝「新劇団がかうなる迄」『生活と芸術』1914年4月号、2-9頁。
- ・伊庭孝「新劇社の思ひで」『新演芸』1925年1月号、37-39頁。

当時の演劇状況については、田中栄三編著『明治大正新劇史資料』(演劇出版社、1968年)、秋庭太郎『日本新劇史・上』(理想社、1955年)、大笹吉雄『日本現代演劇史 明治・大正篇』(白水社、1985年)、松本克平『日本新劇史—新劇貧乏物語』(筑摩書房、1991年)などを参照した。

(2) 『ヘッダ・ガブラー』上演については、伊藤直子「伊庭孝の演劇事始め—『ヘッダ・ガブラー』上演をめぐる」(『コミュニケーション文化』第8号、2014年、156-163頁)を参照。

(3) 『ファウスト』上演については、伊藤直子「伊庭孝における音楽劇の萌芽—ゲーテ『ファウスト』の上演(1913)をめぐる」(『国立音楽大学研究紀要』第49集、2015年、印刷中)を参照。

(4) 森鷗外「日記」『鷗外全集・第35巻』岩波書店、1975年、599頁。

(5) 公演については主に以下を参照。

- ・『出発前半時間・チョコレート兵隊—筋書及役割』1913年10月(早稲田大学演劇博物館蔵)。
- ・伊庭孝『『出発前半時間』と『チョコレート兵隊』との上場に就て』『歌舞伎』第160号、1913年10月、69-72頁。
- ・伊庭孝『『出発前半時間』と『チョコレート兵隊』と』(上)(中)(下)『やまと新聞』1913年10月14・

15・16日、各1面。

- (6) 田中栄三編著『明治大正新劇史資料』演劇出版社、1968年、63—64頁。
- (7) Wedekind, Frank : *Der Kammersänger* (In : Frank Wedekind Gesammelte Werke, Band III. Georg Müller, München & Leipzig, 1913, S.195-240) およびヴェーデキント『出発前半時間』森鷗外訳（『鷗外全集』第3巻、岩波書店、1972年、393—451頁）を参照。
- (8) 伊庭孝『『出発前半時間』と『チョコレート兵隊』との上場に就て』69—71頁。
- (9) 同上、71—72頁。
- (10) 升本匡彦「日本におけるバーナード・ショー(2)ー上演目録ー」『名古屋大学教養部紀要』第11号、1967年、152—178頁。
- (11) Mailer, Franz : *Weltbürger der Musik. Eine Oscar-Straus-Biographie*. Österreichischer Bundesverlag, Wien, 1985. S.49—58.
- (12) バンドマン喜歌劇団については主に以下を参照。
・増井敬二『日本オペラ史～1952』水曜社、2003年、56—58頁および456—461頁。
・星野高「帝劇のくミュージカル・コメディー」『早稲田大学演劇博物館・演劇研究センター紀要 VIII』2007年、59—70頁。
- (13) 伊庭孝『『出発前半時間』と『チョコレート兵隊』との上場に就て』71頁。
- (14) 伊庭孝『『出発前半時間』と『チョコレート兵隊』と』（中）『やまと新聞』1913年10月15日、1面。
- (15) 同上。
- (16) 『近代思想』1913年10月号、広告頁。
- (17) 伊庭孝『『出発前半時間』と『チョコレート兵隊』と』（下）『やまと新聞』1913年10月16日、1面。
- (18) 同上。
- (19) ショウ『武器と人』坪内雄藏（逍遙）・市川又彦訳、早稲田大学出版部、1913年、48—49頁（国立国会図書館デジタルコレクション）。
- 引用した英文の該当箇所は以下の通り（Shaw, Bernard : *Arms and the Man*. In : *Nine Plays*. Dodd, Mead & Company, New York, 1948. p. 143.）。
- Sleep, sleep, sleep, sleep, slee—. Where am I? Thats what I want to know : where am I? Must keep awake. Nothing keeps me awake except danger : remember that : danger, danger, danger, dan—Wheres danger? Mus' find it. What am I looking for? Sleep—danger—dont know. Ah yes : now I know. All right now. I'm to go to bed, but not to sleep. Be sure not to sleep, because of danger. Not to lie down either, only sit down. Ah!
- (20) ショウ『チョコレート兵隊』伊庭孝訳、新劇社出版部、1913年、47頁（国立国会図書館デジタルコレクション）。同書には戯曲の翻訳のほか、バルカン半島史や関連の地図が収められ、読者への便宜が図られている。
- (21) 引用した新聞・雑誌は以下の通り。
・国枝史郎「伊庭孝一座を観る」『時事新報』1913年10月18日、5面。
・蝶二「新劇社劇」『萬朝報』1913年10月18日、3面。
・木犀「面白い伊庭孝一座」『やまと新聞』1913年10月18日、4面。
・四男「新劇社興行」『二六新報』1913年10月19日、3面。
・澁六（堺利彦）「胡麻塩頭」『近代思想』1913年11月号、12頁。
・寒（荒畑寒村）「伊庭孝一座」『近代思想』1913年11月号、14—15頁。
・楠山正雄「伊庭君の芝居」『生活と芸術』1913年11月号、49—51頁。